健康と光線

発行所
〒153
東京都目黒区目黒
4－6－18
サナモア光線協会
年4回発行
会費 年500円
電話 東京（03）
793－5281
712－5322

眼科領域に於ける光線療法

―文献的考察を中心にして―

サナモア光線協会
サナモア中央診療所
医学博士　宇都宮　光明

はじめに

抗生物質や副腎皮質ステロイドホルモンが臨床に応用されるようになって、感染症やアレルギー疾患の治療が一変したことは周知の通りです。現今、眼科領域に於いても、衛生環境の整備も加わって、感染あるいは感染アレルギーに基ずく病気は以前と比べて減少しましたが、反面「そこひ」や成人病合併症のように外見上は何の変化もないが水晶体や網膜等に障害を起こし、視力障害を来しやすい眼疾患が主な対象になりました。

光線療法も、抗生物質が発見される以前は、主に結膜や角膜の感染症や感染アレルギーに基ずく疾患に応用されました。一方、近年に於いては、レーザー光線が眼底障害を始め眼科治療に無くてはならない治療法として利用されています。

今回は、眼疾患に光線療法を応用した文献を辿りながら、眼科治療にサナモアを併用する意義について二―三考察します。

基本照射（全身照射）の意義

色々な全身疾患で目の症状を訴えること、また目を調べることで病気の重要な手掛かりが得られることから、「目は病気の窓」と言うことができます。これは目の病気を全身性疾患の現れとして捉える必要があることを示しています。従って、目への照射だけでなく身体から治すために全身照射を合わせ用いなければならないことを示唆します。

例えば、わが国の日光療法の先駆者、正木博士は、結核性角膜実質炎が、約二カ月の全身日光浴のみで治癒した症例を報告しています。また日赤病院の松本博士は、人工光線発生装置を使って結核アレルギーと考えられたフリクテン（目ぼし）の四例に全身照射を行い、次のように述べています。

「点眼内服にては効果がなく、反復して両眼を侵し、羞明（眩しさ）流涙甚だしく、数年間間断なく再発又再発して悩まされていた患者に於いても、全身療法によるなら著効を奏し得るのである」。

眼部への照射

眼疾患の治療に光線療法を用いる場合、全身照射に加えて眼部への局所療法を必ず併用しますが、局所照射の生物学的作用は、大略次の如く要約できます。

1.炎症に及ぼす影響

殺菌作用、消炎作用等を介して炎症の治癒機転を促すと共に、組織の再生を促進する。

2.新陳代謝に及ぼす影響

照射部の血管を拡張させて該部の血流量を増加させる結果、栄養補給、老廃物の排泄が容易になり、組織の生活力が高まる。

3.眼底に及ぼす影響

眼内に入った光線は、水晶体のレンズ作用によって眼底に結像し、その熱作用によって眼底の組織を凝固（光凝固療法）させる。

光線のこれら局所作用を利用して治療した諸家の報告から、効果が検討された疾患を挙げると、ほぼ眼科全域に及びます。

前出の松本博士は、主に結膜、角膜、虹彩等の炎症（結核性を含む）に局所療法を行った成績について、ほぼ全てに良好な効果を認めたことを報告しています。その一節で「匐行性角膜潰瘍（つき目）は眼疾患の中でも最も危険にして、最も苦心する疾患であり、今まで確実な療法なく、失明の転帰をとること少なからざるに際し、光線療法が確実に著効を奏するならば、治療上に一大革命とも言うべき福音たるを失わざるべし」と記し、主として結核性並びに梅毒性角膜実質炎の光線療法を行った山田博士は、「初期のものは進行を頓挫せしめ、進行せるものは速やかに混濁を吸収せしめて、失明を免れ得るが如き偉効あり」と述べています。

近年、眼底疾患の治療にレーザー光線が盛んに用いられていますが、その切っ掛けとなったものは、高エネルギー光、例えば太陽光やカーボンアーク光が水晶体（レンズ）を通って網膜に集中して日蝕性網膜炎（日蝕観測で起こすことからこの名がある）を起こすと、他の網膜疾患が著名に改善する事実が知られていたからです。この光線の既知の効果と、眼底疾患の治療が場所的に極めて難しい事があいまって、方向指向性に優れたレーザーが実用化された直後から、網膜剥離、眼底出血、中心性網膜炎、糖尿病性網膜症、高血圧性眼底障害、眼内腫瘍等に対して積極的に臨床応用がなされた結果、今日の隆盛を見るに至ったのです。

おわりに

光線療法を眼科領域の疾患へ応用することをためらう人も居ますが、使用上の注意を守りさえすれば害のない有用な治療法です。この点の理解を深めて頂き、眼疾患の治療にも積極的に併用して下さることを願って若干の文献を紹介しました。

（サナモアの具体的な使用法については、五、六面に記載しました。）

視力障害に光線の効果

A. L. ハクスリ

現代人は光を恐れる

光は目に悪いと言う甚だ有害で、しかも全く根拠のない意見が出てきたのは、ついこの頃のことである。数百万年の間、眼はあらゆる強さの光にうまく自分をあわせてきた。それが今や色のついたサングラスという緩衝物がなかったならば、日光はもとより灯火にも耐えられないと言った情けないものに変ったのである。

感覚器官が光に堪えないものだという突飛な考えは、ほんの過去二十年以内において一般的になったのである。昔は黒眼鏡をかけた人は、怖い人、気の毒な人という風に思われ好奇心と同情心の入りまじった気持で見られたものだ。

今日では事情は全く一変した。黒眼鏡をかけることは極くあたり前のこととなったのである。それはむしろ賞讃さるべき行為だといわんばかりに夏のファッション雑誌にはサングラスをつけた若い女性がでかでかと出ている。最早、黒眼鏡は悩める者の象徴ではなく、若さと意気と性的魅力を兼ね備えたものとなったのである。

眼を暗くするというおかしな流行は一体どうして始まったのであろうか。実のところ、それは日光の中の紫外線に対する要らざる恐怖に始まった。この考えを着色硝子や眼鏡縁の製造業者が利用し助長し育成し普及したのである。

彼等の宣伝はよくきいた。現在西欧では海浜や運転中だけでなく、黄昏時の薄暗い光の廊下でも数百万の人々がサングラスをかけている。サングラスをかければかけるほど、彼等の眼は弱くなり、光に対する保護の必要が大きくなることは確かであろう。

眼を日光に近づけよ

眼を日光にさらすことによって視力障害の治療をするベーツ博士の方法に反対する人達は、それが恐ろしい結果をもたらす話をしたがる。例えば、盲目になるかも知れないとおどかすのである。

太陽に向って両眼を閉じ、太陽光線が眼のあらゆる個所に同じ強さであたるように首を左右に静かにまわすことを一回につき少なくとも十分位、日に三回行った人々に対する大規模な調査並びに私の個人的な経験からいって、これらの話は全く真実ではない。眼を日光にさらすことによって有害な結果を招くことは決してないのである。

若し正しい方法で眼を日光にさらすなら、却って眼の器官は快くゆるみ、血液はよく循還し、視力は改善する。その上、眼や瞼のいろいろな炎症は非常に早く浄化されるのである。

これは何も驚くには当らない。日光には強い殺菌作用があり、上手に使うと人体に対する貴重な治療剤として働くからである。日光が他の外部器官に対して有益に作用するのと同様、眼にも有益に作用してはいけないと言う理由はどこにもない。

太陽光線は、長時間じっと凝視した場合にだけ、眼に有害な結果を生じることがある。例えば、日蝕を見た後で、部分盲や全盲になった例が報告されている。だがこれらは本人に何の害も残さないで間もなく消失するのである。

何んでもそうだが、やり過ぎていいと言う事はない。日光も適当に使えば有益だが、その量が多すぎたり、誤った方法で使われた時には害を及ぼすこともある。

しかしベーツ博士の方法で治療を受けた人々の中には、こんな目にあったものはない。そのためには氏の言う通りに太陽に向って両眼を閉じ、頭をゆっくら左右に振るようにすることである。

◇　◇　◇

「健康と光線」昭和39年1月5日発行—太陽になれる技術—昭和41年5月5日発行—眼鏡よさよなら—宇都宮　義真が、A・L・ハクスリ著「眼鏡よさよなら」より引用掲載した記事を要約して転載しました。

讃光譜

「汐干狩り」

宇都宮義真撮影

応用光線療法学 (29)

□ ビタミンDの作用 □

その 26

（前）号に糖尿病治療の基本は食事療法と運動療法にあり、必要に応じて薬物療法（経口血糖降下剤、インスリン）が併用されるが、これらの治療に光線療法を加味すれば、インスリンの成生を促して糖代謝を改善すると共に、慢性合併症の予防並びに治療に一層の効果を期待し得ることを述べた。本号でも引き続き慢性合併症に対する光線療法の役割について考察する。

（糖）×尿病合併症が徐々に進行して、下肢の細動脈の細小血管症による血液循環不全に加えて多発性神経障害による知覚障害が悪化すると、足に神経障害性潰瘍が出来るが、糖尿病患者の感染に対する抵抗力は著明に低下しているため容易に潰瘍面に細菌感染を起こし、前号に示したような糖尿病性壊疽になるのである。本症は一度起こすと、循環障害のために抗生剤が患部に届きにくいことや肉芽の形成が著しく悪いこともあって難治である。

この糖尿病性壊疽に対して光線療法はしばしば著しい効果を示すのである。この効果は患者自身が眼で見て確かめることが出来るので、光線療法の効果を知る上で貴重なものである。

×　×　×

（こ）の場合、治癒に至るまでの作用機序は以下のごとく考案し得る。

一、局所循環不全の改善

病変部に光線を照射すると深部温熱作用により局所温が上昇するが、その際、生体は発生した熱を血流を介して他部位へ移動しようとする。これに光化学物質による全身的な血管拡張作用も加わる結果、局所の血液循環を改善するのである。

二、神経機能の回復

神経機能が糖尿病性壊疽に関わること、光線が神経機能の回復に有益なことは既に求べた通りである。

三、殺菌効果

柴外線に表在性の菌に対する殺菌効果があること、柴外線が到達しない深在性の菌に対しては白血球の貧食機能を増すことによる間接的な殺菌効果があること、並びに血流の改善により患部へ抗生剤が届き易くなることによって感染の治癒機転を促す。

四、肉芽形成

光線は組織の再生を促し、肉芽の形成を佳良にする働きがあり、このような難治性潰瘍でも創傷の治癒を促進するのである。

×　×　×

（糖）尿病性網膜症とは、経過中に網膜の血管に細小血管症を起こした結果、血液循環が阻害されたり血管が破綻して出血を起こしたりするために、稀ならず失明する厄介な病気である。この病気を悪化させる要因は、糖尿病の管理不十分にもあるが、逆に治療のやり過ぎによる低血糖発作を起こすと急速に悪化するので注意する必要がある。

本症に対する光線治療は、眼を閉じた上で眼部に照射するが、照射された光線は水晶体のレンズ作用によって屈折され、硝子体を通って網膜上に集光する結果、網膜の血液循環を改善すると共に、浮腫や出血があれば吸収を促すように作用する。即ち、日頃から光線治療を併用していれば、糖尿病性網膜症の発病を予防する効果を期待し得るし、また現に起こした患者では治療効果を期待し得るのである。

因に、進行速度が早く失明の恐れが強い場合には、眼科ではレーザー光線による光凝固法が使われている。

×　×　×

（眼）科領域に属する糖尿病合併症に、他に糖尿病性白内障がある。この際の光線治療の効果は、血管を拡張して血法量を増し、栄養補給、老廃物の排泄を促し、組織の生活力を高めることによって、水晶体の濁りが進行しないようにすると共に、可能な限り減少させることを期待するのである。

×　×　×

（糖）尿病性腎症は、糖尿病に伴う血管系の合併症の一つで、腎動脈の硬化が主因になることは既述したが、症状とビタミンDとの関連について付け加えておく。

この病気の特徴は、初期にはごく僅かの蛋白尿を認めるだけだが、病気が進行すると大量の蛋白尿を認めるようになると同時に、浮腫、低蛋白血症、高コレステロール血症、高血圧が出現する。このように大量の蛋白質（一日尿蛋白3.5g以上）を伴う状態をネフローゼ症候群と言うが、原因が糖尿病合併症にある場合、特にキンメルスティール・ウイルソン症候群と呼ぶ。

本症候群では、原因のいかんを問わず血中の蛋白が大量に尿中に漏出する結果、蛋白と結合してしまうため、尿蛋白が多ければ多いほど血中ビタミンDも減少する。そのため腸管でのカルシウムの吸収の低下、低カルシウム血症、尿中へのカルシウムの排泄の減少、骨軟化症を合併し易いのである。この機序を図に示した。

更に病変が進行して腎不全に陥れば、腎臓組織の破壊消失のためビタミンDを活性化出来なくなる。

既に述べたように通ビタミンDの点についてもこの点についてはビタミンDの代謝異常を予防する必要がある。

糖尿病とビタミンD作用の低下

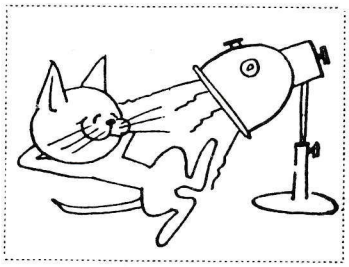
（…は代謝されることを示す）

医学博士
宇都宮　光　明

（以）上の他にも、おできが出来易くなったり、皮膚全体ある訴いは陰部に限局した強い痒みを生々えた症状が汗かきにはなく、これらは直接生命には影響しないが、自覚的に甚だしい苦痛を伴うことも少しなく治療する作用や、どんな痒みでも即座にも応用することができる。

可能である。

以上、糖尿病に対する光線の作用について考察し、光線療法は本症管理上有益な一つの手段として併用し得ることを述べる。



治験例報告

☆右上肢化膿（蜂窠織炎）に併発した骨髄炎

症例　50歳　女性（主婦）

症状　胃腸病のため西宮病院に入院し点滴を受けていたが、昭和61年1月点滴中に液が漏れた右上肢の肘関節部から化膿し始めた。この化膿性炎の進行はすさまじい速さで、たちまち肘関節部周辺から前腕、手首へと広がり、腕は石のようにかたく腫れ上がり、症状は悪化の一途を辿った。

そのような時に医師から「骨髄炎を併発しているから、経過によっては上肢を切断する必要がある」と言われたのである。

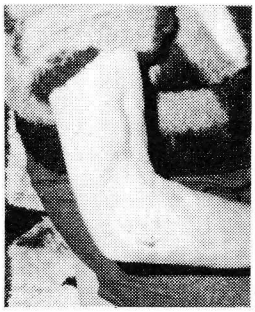
本例は腕を切断されたら大変だと、早速本人所有のサナモアを病院の許可を得て持ち込み、電話で相談してきたので、容体を聞きながら照射法を指導した。

療法経過　患部にはBCカーボンを使用した。まず上腕、肘、前腕、手首に外側および内側の二方向から開放で各10分見当で照射した上で、特に化膿の酷いところには集光一号を使って10～15分追加して朝夕二回照射するよう指示した。また他にAカーボンで腹、膝、足裏、腰、背に各5分照射した。

治療開始一カ月後に小康を得て退院、以来週に一回はウエノ光線療法に通いながら毎日治療を続けた結果、漸次症状も改善して良くなった。（写真）は化膿が殆んど治り、わずかに血膿が出る段階のものである。

しかし本例の場合、肘関節に最も激しい炎症を起こしたため、肘関節は写真の如く屈曲して伸ばせないのであるが、手術せずにすんだので喜んでいる。

■注　蜂窠織炎とは、広い範囲に渉って瀰漫性の化膿性炎を起こした場合で、高度な組織障害を起こし、広範囲な壊死をきたすことがある。



ウエノ光線療法
上野　貞氏報告
TEL　〇七八―三三二―一三五八

☆左眼瞼および眼球結膜の火傷

症例　38歳　女性

症状　元日に天ぷらを揚げていた時、油が飛んで左眼瞼と眼球表面に火傷をした。受傷直後から酷い眼痛を起こしたため、慌てて眼科を受診し手当を受けたが、帰宅後も痛みがとれないし、涙はとめどもなく流れ、眼は腫れ上がった。

患者は日頃からサナモアを使っていたが、眼のことなので怖くなり、治療をしてほしいと来所された。

療法経過　Bカーボンを使用し、先ず眼を閉じたまま30分照射（第二集光器）したところ大分楽になったので眼瞼を開いて見たら、白目（結膜）と黒目（角膜）の境から白目よりに直径4～5ミリの炎症を認めた。火傷の大半が白目でほっと安堵した。引き続いて眼を開けたまま目尻の方に動かし、第三集光器を使って患部に20～30分照射しては5～10分休みながら、痛みが治まるまで繰り返し照射した。約5時間の治療で痛みがなくなり、涙も何時のまにか普通になった。最後に眼瞼の少々赤味が残っていた所に15分ほど照射して終りにした。

元日の正午過ぎから5時過ぎまで治療に掛かり切りであったが、平常通りの状態になり喜んで帰った。その後は何事もなく、却って視力がよくなったと言っている。

前田光線治療所
前田ミサ氏報告
TEL　〇九二―五八一―二〇三九

☆肋膜炎

症例　46歳　女性

症状　肋膜に水が溜まり、少し熱があり、咳もあり、息苦しいため、病院の入退院を繰り返していたのを見兼ねた友人が紹介した。

来院時、かなり苦しそうに見えた。

治療経過　早速Aカーボンを使い、二灯照射で治療開始、まず一台の治療器で肛門に10分間照射中に二台目の治療器で顔に10分照射、次に一台目で腰10分、二台目には集光器一号を付けて喉に5分、集光器をはずして膝5分の計10分、次に一台目で足裏10分、二台目で腹10分、次に一台目のみで背5分、ここで横臥位から仰臥位にして、一台目で左耳5分、二台目は右手を上に上げ右脇5分、右手を下ろし右肩5分、その間に一台目で左腸骨に5分、次に逆にして照射してから、一台目で右膝、二台目で左膝に側面から照射して終了した。この治療で呼吸が楽になり苦しさがとれた。以来毎日治療を続けた結果、四カ月後には肋膜の水も溜らなくなり、咳も出なくなったが、まだ当分の間は安静を旨とするよう注意

川崎市　東京光線治療院
海渡一二三氏報告
TEL　〇四四―七二二―五〇六七

愛用者だより

☆サナモアは私の主治医

福岡市　吉田　礼子

いつも健康と光線ご恵送頂き有難うございます。

私もサナモアを愛用して早15年になります。59歳の今日まで元気に働くことができたのも、サナモアのお陰だと感謝致しております。長い歳月いろいろなことがありました。病気や災害は何の予告も無く襲ってくるもので風邪やギックリ腰、打撲、神経痛、歯痛、腹痛等の激痛を速やかに直してくれた光線は私の名医です。

兄弟、姉妹、親類、友人、知人、皆サナモア愛用者で、どれだけ恩恵を受けているか計り知れないものがあります。

信ずる者は救われるという信頼感をもってずっと続けてゆきたいとおもいます。サナモアは生涯、絶対に離すことのできない私の主治医です。

☆急性胆のう炎

神戸市　松本　栄一

昨年の11月、40度の発熱をし直ぐ診察してもらった結果、急性胆のう炎ではないかとのことでした。4、5日してもかんばしくなく困っているところ知人の御好意でサナモアをお借りしました。

以後、朝晩毎日2回治療を行いました結果、医者も驚くほど良くなってまいりました。現在、家でもサナモアを求め毎日光線治療を行っております。

本当に有難うございました。

眼科領域に於けるサナモア光線療法

―応用面について―

サナモア光線協会
医学博士　宇都宮　光明

目を閉じていれば害はない

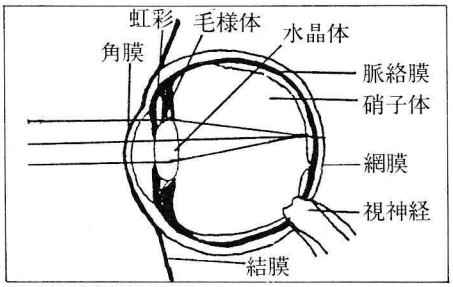
サナモア愛好者の中にも、目の病気には「害があったらこわいから！」と言う理由でサナモアを使わない人を見受けます。ましてや未経験者では、かけたら失明すると思いかねないかも知れません。

これは紫外線に結膜や角膜がさらされると、目は真っ赤に充血し、激しい眼痛、羞明、流涙を起こす結膜炎や角膜炎（電気性眼炎または雪眼炎）がよく知られているからでしょう。反面、その状態がいかに痛ましくとも、「病後の経過は良好で一―二日以内に必ず治癒する」事実はその割に知られていないために一層恐怖心をかき立てられるようです。

しかし、サナモアを目に照射する際に目を閉じてさえいれば何の弊害も起こしません。その理由は、紫外線は極端に透過性がなく皮下〇・五ミリ程度までしか達しないため、結膜や角膜が紫外線にさらされる可能性は全くありませんので、結膜炎や角膜炎を起こすことも有り得ないからです。私達の経験でも、この注意さえ守れば危険が無いだけでなく、時として予想を超えた効果を見ることさえあります。

この点について前出の山田博士（**一面参照**）も、「眼に強力なる炭素弧灯にて実験的に数十時間連続的に照射せし事あり、又数時間宛毎日十数回も照射し、これが経過を六カ月間も観察せし事ありしも何らの変化を発見し得ざりき。而も難病中の難病なる結核性角膜実質炎も比較的速やかに完全に治療せしめ得るが如き偉効ある事を記し、以て眼科専門家に臨床上進みて局所照射を推賞して己まざる次第なり」と述べています。

一方、透過性に優れていて眼内に入る可透光線や近赤外線には紫外線の作用はありませんので何の心配も要りません。これらの光線は水分による吸収が弱いため、眼房、瞳孔、水晶体、硝子体などに病変がなければ、眼透光体に損傷を与えることなく素通りし、眼光学系で集光された光が吸収率の高い網膜に達して作用します。この際、網膜上の一点に光のエネルギーを集約させないようにするために頭をゆっくり左右に振るようにします。



眼球の水平横断面図
光線が網膜に結像する有様を示す。

基本照射で体質を改善

一面に記載した正木、松本両博士の報告の共通点は、目の症状が主でも目だけの病気でなく、何れも結核アレルギーの関与が強く示唆されていることです。このように眼科領域の疾患の場合、しばしば他の疾患が関わっていることがあります。例えば、成人病（高血圧、糖尿病など）に伴う網膜症や、アレルギー性結膜炎や、ベーチェット病で見られるブドウ膜炎など主症状が目にあっても、全身疾患の一症状です。また原因のよく分からない眼疾患も少なからずあります。よしんば眼に限局した感染症であっても、身体の抵抗力を強めることは有意義です。これらの点から全身への照射を必ず行います。

具体的には、一見眼に関係ないようですが、ABカーボンで腹、腰、膝、足裏などに各10分程度の基本照射をします。その上で眼部への局所療法を欠かさず行います。

局所照射に際して―適応症の見方

サナモアを眼疾患の治療に併用する場合、AB又はAD又はBDカーボンで、眼部（必ず目を閉じて）10―20分、首筋（後頭部）10分照射します。以下、サナモアを併用して効果を期し得る眼疾患を症状別に述べると共に作用機序につき付言します。

☆疲れ目と眼精疲労

日常生活の中でも目を酷使する機会は増えています。目を酷使すれば誰しも目は疲れます（疲れ目）。一方、普通に使っていても異常に目が疲れ易く、頭痛や眼痛を起こし、仕事を続けられない人もいます（眼精疲労）。

こんな時サナモアを使うと目の疲れが取れてすっきりします。先ずここから試して貰って、目に好影響があっても悪影響のないことを確かめておくと、他の目の病気の場合にも安心して使えるようになります。

なお眼精疲労を起こす原因について補足しますと、遠視、乱視、老視のような調節異常（近視では起こりません）や眼筋の機能不全から、各種の眼病、全身の健康状態まで実に雑多ですが、原因を究明して治療することも忘れてはいけません。

☆まぶしくて（羞明）

涙がでる（流涙）

異常なまぶしさがあり、涙が絶えず流れ出て、目を見ると充血しているようなら、病気は目の前半部（結膜、角膜、強膜、虹彩、毛様体など）の炎症です。

原因は、細菌性、ウイルス性、アレルギー性、外傷性、化学的刺激、紫外線など明らかにし得るものから、今もって原因の良く分からないものまで様々です。このうち感染に基ずく病気は、抗生物質や衛生環境の向上によって減少しましたが、全身疾患に伴って起こるものや原因不明のものなど、治しにくい厄介な病気に遭遇する機会が増えました。

サナモアには原因のいかんを問わず、あらゆる炎症を鎮める効果がありますから（**一面参照**）、併用することによって症状を軽くし、治癒機転を促すことが可能です。

（六面へつづく）

（五面よりつづく）

☆結膜下出血

白い強膜上にあざやかな赤い出血斑を認めますので、驚いて問い合わせてくる人がいます。この病気は中年の男女によく見られますが、後遺症を残さず必ず治ります。

サナモアは出血斑の吸収を速めますので、治療期間を短縮します。

☆目の前を何かが飛ぶ（飛蚊症）

硝子体に濁り（硝子体混濁）があると起こります。眼病が原因で二次的に起きた病的なものと、老化によって起こる生理的なものがあります。

サナモアは濁りの吸収を促進します。

☆目が痛い（眼痛）

激しい目の痛みは眼球の細菌性感染などでも見られますが、最も注意しなければならないのは発作的に眼圧が異常に高くなる緑内障でしょう。緑内障で眼圧がコントロール出来ずに高い状態が続くと、眼底の視神経が陥没するため周辺から見える範囲が狭くなり、遂に失明することも稀でない恐ろしい病気です。

緑内障の薬物療法には、縮瞳効果のある点眼薬や利尿剤が使われます。これをサナモアと対比してみますと、眼部照射時には瞳は縮み、全身照射で尿の出がよくなる効果に相当します。しかし眼圧がどうしても正常値まで下がらず失明の恐れがある場合には、手術しかありませんので専門医の指示に従って下さい。

他に最近むしろ増えた病気に、三叉神経眼枝の分布領域に帯状ヘルペスウィルスによって起こる帯状疱疹がありますが、病変が結膜や角膜にも及ぶと激しい眼痛を訴えます。

この際、サナモアは痛みを和らげ、組織の再生を促し、治癒を速める効果があります。

☆見えかたが悪くなる（視力障害）

多くの眼疾患が原因になりますが、年齢や症状などを参考にすれば、ある程度の見当をつけることが出来ます。

中でも特に高齢者に多いのが、水晶体が濁って瞳が白く見えるようになる白内障（老人性白内障）です。白内障には他に糖尿病性、外傷性、併発性、放射能性などもあります。

サナモアを使うと、濁りが減少したり進行が止まったりします。ただしあまりに視力障害が強ければ、手術的に水晶体を摘出する開眼手術を受けるしかありませんが、手術を急ぐ必要はありません。

原因が眼底の網膜や視神経にある場合、一切を含めて黒内障と呼びます。成人病（動脈硬化、糖尿病等）に伴う視力障害も原因は主に眼底にあります。このうち見たいところが見えなくて周りは見える（中心暗点）のは、視神経炎、中心性網膜炎、眼底出血などで起きます。逆に中心は見えるのに周辺が見えない（視野狭窄）のは、緑内障、網膜剥離などです。

サナモアは網膜の浮腫や出血の吸収、循環の改善など多くの有益な治療効果を介して病状の改善に寄与します。

まとめ

私達にとって物が見えることは正に不可決です。片方に眼帯をしただけで実に不自由です。ましてや中途失明の苦しさは想像を絶するものがあります。従って、特に視力を失う恐れのある場合には最善を尽くさなければなりません。それには先ず眼科専門医の適切な助言、治療を受けることが大切です。

しかし現状は未だよい治療法のない眼の病気も多いため、視力を保てるか予断を許さないと言われることも珍しくありません。こんな時でも、眼科医の治療に、サナモアを併用して見て下さい。以前から知られていた日蝕性網膜炎の眼底疾患に対する治療効果が、今レーザーによる光凝固法として広く応用されるに至ったように、光線治療には極めてユニークな効果を期待し得るからです。

☆　☆　☆　☆　☆　☆

サナモア

Sanamoa

サナモア光線協会

趣意書

天地創造の昔から、真の光、即ち太陽光線は、私たちに限りない恩恵を与えています。サナモア光線療法は、この太陽光線の健康増進、疾病予防および治療効果を利用した治療法です。従って、目に見える可視光線だけでなく、目には見えないが無くてはならない紫外線や赤外線を目的に応じて適切に放射しなければなりません。

このサナモア愛用者を以て、光線療法の研究を行うと共に、啓蒙　普及活動を行うためサナモア光線協会を設立しました。

サナモア光線協会は、設立の趣旨に賛同載いた会員にて構成し、季刊紙「健康と光線」を発行します。

サナモア光線協会
医学博士　宇都宮　光明

協会では、会員を募集しております。
入会希望者は、左記宛御申込み下さい。
〒153　東京都目黒区目黒4—6—18
サナモア光線協会TEL(03)七九三—五二八一
七一二—五三二二

（本紙の無断転用を禁止します。）